
ラクガキマール

吉岡カズト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラクガキマーブル

【Nコード】

N3905Y

【作者名】

吉岡カズト

【あらすじ】

落書き帳を使った事がありますか？

ほら、白い紙が何枚も綴られているアレですよ。

彼女の落書き帳はシャーペンで書かれた文字だらけ。

ある日の朝、そのシャーペンの字の上から赤ペンで、奇妙な文字列が書き殴られていました。

はじまりはじまり

理想と現実って、よく対義語みたいに扱われるけれど、実際は違うと思う。

いや、それも合ってるのか。

正の反意語が負と誤の二つある様に。

きっと理想にも現実にも複数の対義語があるのだろう。

私が思うに、理想の対義語は限界、現実の対義語は夢。……使い方を考えれば、結局似た様な物かもしれないけれど。

理想と現実とは両極端で、理想と限界は同じ方向の前後からの抑え込み、現実と夢はコインの裏表的な。

でも私は、この解釈に明確な価値を見出しているつもりだ。

自分の生き方の指針。人生の道標。

理想を追い求めることは素晴らしいことだ。大いに賛美すべき思想だ。でもいずれは限界が見えてしまう。見えた限界にたどり着いて尚その上を目指すのは、私からすればただの拘泥だ。

現実を見据えるのは素晴らしいことだ。誰しもが憧れる精神だ。でもいつまでも現実ばかりを見てはいられない。だから人は夢を見る。現実には飽きて尚現実しか見れないのは、私からすればただの頑固だ。

寝ても覚めても見える限界は同じ。

寝ても覚めても見える夢は同じ。

ならいつそ、理想と限界を並列に見て、現実と夢を平行に見て、真っ直ぐな自分でいられたら……。

だから私は常に自分を貫き通す。そうすることで、自分の存在を自分自身で認識しながら生きていたいから。

認めよう、私は私だ。他の誰でもない、誰も代わりえない、唯一の私。

なんて、脈絡のない思考を披露してみたりして。

「……みたりして、と。……ふう」

ここまで書いたところで、私は首を捻る。
なんだかキザっぽいなあ。

一応自分の思考をそのまま文字起こしただけではあるのだけれど、どこか見栄が出ているような気がする。ていうか、出てる。

「んー、おかしいなあ……あは」

自分探し初心者私としては、つまりこれが現時点での限界なのかもしれない。追い求める理想は今のところないけれど。自分探しに理想なんか重ねたらダメだ。混ぜるな危険。

自分探し。

一時期流行った言葉。今はどうだろう、もう死語なのかな。

私は自分探しをしている。

でも旅には出ていない。今いるのも自室の勉強机とセットになっていた椅子の上だ。

強いて言うなら、頭の中を旅しているような。それも表現としては大袈裟だけれど。

大袈裟なう。

……。

「いい加減寝よう……」

仰け反って背もたれに体重をかけながら体を伸ばす。ついでに後ろの壁にある掛け時計を見ると、十時半を少し過ぎていた。

夕食を摂ってお風呂に入って、勉強もせずに落書きしていたから実に二時間の浪費だ。ウェイストオブタイムだ。

自分探し、オンザペーパー。

小学校で自由帳を使っていたのを覚えている。小学生の必需品、とまではいかないけれど、休み時間の友だちと思う。

私が使っているのも似たような物で、白い紙が百枚ほど綴られた

落書き帳。こうやって意味のないことを書いたりすることもあるけれど、メモとかにも使えて案外便利だ。

私は自分の思考を綴って、文字に現れる自分を探している。文章に表れる自分を捜している。

だから、ある意味自分探し。

つまりただ単に旅に出る度胸がないだけ。

だって私、まだ高校生だし。

「学校があるから旅になんて出れないよ……」

小声でつぶやいて、ベッドに潜る。

動物の緊張が一番弛緩するのって、やっぱり寢床だ。何せ潜った瞬間に眠気が襲ってきたのだから。私は素直に目を閉じ、一日を終える。

……………。

そして夢の中へ。

暗い。真っ暗だ。一点の光も見えない。

体に触れるものがなにもなくて、私が今落ちているのか、浮かんでいるのか、それすら判断出来ない。

口を開くと、コポコポ泡が出て。

海の中、それもかなり深い位置だということに気づく。私は海の中にいるんだ、って。

体がギシギシしてうまく動かない。

水圧、だっけ。

関節が圧迫されるから動かしにくくなるんだろう。

体にまとわりつく物を感じるから、なんらかの衣服は着ているはず。動きづらい理由追加。

でも、なぜか息は苦しくないし、寒くもない。

自分が夢の中にいることがなんとなくわかる感覚。ついさっきベ

ツドに横になった気がするし。潜ったんだっけ。だから海なのかな。ということとは、着ているのはパジャマかもしれない。

ずっと足がつかない。手を振り回してもなんにも触れない。

たった一人で海の中。

浮かびもせず、沈みもせず。

真っ暗な世界に景色の変化はない。

なにも情報が入らない。

人間は新しい情報がなにも入ってこない場所に閉じ込められると発狂するらしい。

私も夢の中で発狂するのだろうか。

発狂したらどうなるんだろう。

らっきょうが食べなくなるのだろうか。

私はらっきょうが好きだから発狂しなくても普通に食べるけれど。海って広い物の象徴みたいなイメージがある。実に地球の表面の七割を覆っているわけだし。突然現れた宇宙人に観光案内をするならまず海を見せないといけないだろう。海の水を飲ませればなおよし。

そういえば、海には童謡があったっけ。広いとか大きいとか、外国に行きたいとか。どこまでものんきな歌が聞こえてきそうだ。そんなことを考えていたら、夢の中のはずなのに眠くなってきた。私は目を閉じた。目を閉じて、開けていた時と変わらず真っ暗だった。

.....。

夢を見た。変な海の中の夢。右も左も上も下もない夢。

体を起こす。壁に掛かっている時計も、窓の外の明るさも、今朝だという事を私に教えてくれている。

夢を見ていた時間が、実際に寝ていた時間より短いから、なんだ

か時差ぼけな気分。時差ぼけなんて体感した事がないけれど。

ふと机の上を見ると、落書き帳が片付けられずに放置されていた。家族に見られると困るからいつもは隠しているのだけれど、どうやら昨日は眠気に負けて忘れていたようだ。

危ない危ない。

あるいはもう見つかったかも。

どちらにせよ片付けるけれど。

と、手にとってみて、異変に気付いた。

むしろ異常か。

『ゆめうつつかきりあこかれならへともいつれもひとしくわれをみたさす』

私の落書きの上に、わざわざ赤ペンで、ひらがなの羅列が書き殴られていた。

いつもと違っていつも通りの朝

『ゆめうつつかきりあこかれならへともいつれもひとしくわれをみたさす』

落書き帳に縦書きで書き殴られた赤い文字列は、ずっと眺めていても消えなかった。瞬きしても消えなかった。

当たり前か。

幻かもと思っただけで、そんなわけはなかった。赤ペンのインクが、私の落書きにまぶされて、まるで血糊みたいだ。幻ではなく、現実に上書きされている。シャーペン字の文字たちが赤ペン字に食われているように見える。文字同士の喧嘩だ。くわれるだけに。

乱暴なイメージしか感じ取れない。ただのひらがなの羅列なのに、書き殴る、という言葉のせいかな。殴ったのは王だ。いや、流石に寒いけれど。

ひらがなの羅列、って復活の呪文？

復活の呪文って、何桁だっけ。

赤いひらがなは32文字。

あるいは暗号かもしれない。全部清音だし。そう思うと、そう見えてくる。

32と言えば、2の5乗がすぐに浮かぶ。試しに2 / 4 / 8 / 16 / 32文字目を取り出してみると。

『めつりとす』

意味不明だった。

あるいは九九の4 × 8 = 32かもしれない。試しに文字を長方形に並べてみると。

『ゆめうつ

つかきり

あこかれ
ならへと
もいつれ
もひとし
くわれを
みたさす』

『ゆめうつつかきり
あこかれならへと
もいつれもひとし
くわれをみたさす』
やはり意味がわからない。

一つ飛ばしに読んでみたり、逆順にしてみたり、ずらしてみたり
したけれど、どの方法もまともな文章が出てこなかった。

んー。本当に暗号なんだろうか。私の目の前で赤い32文字がマ
ーチング。私の落書きとの喧嘩に勝ったお祝いかな。

朝の貴重な時間を、また浪費してしまった。その浪費を嘆いてさ
らに浪費。

素早く登校の準備を終え、学校へ向かう。

朝食はトーストにマーガリン。食べている間に、お母さんに私の
部屋に入ったかどうか聞いてみようかとも思ってたけれど、あんない
たずらをした人が素直に答えるわけがないので聞かなかった。答え
を聞いても本当か嘘かがわからない質問なんて無意味だ。

私が通う県立霧雲きりぐも高校は自転車で30分くらいのところにある。
歩けば50分。高校があるのが山を削ったニュータウンの中なので
坂道が多い。雨の時は歩いて登校するのでかなり早めに出る。

私が霧雲高校を志望したのは、単純に近いから。進学率は公立高
校にしては高めだけれど、偏差値はそれほど高くはなく、同時に低

くもない。いわゆるピンキリな生徒が通う普通の学校だ。

部活動も特に強くない。……あ、バドミントン部に一人強い人がいるんだっただけ。よく知らないけど、噂になるほどなら相当強いのだろう。ちなみに私は帰宅部。

自転車を駆って学校についてみれば、グラウンドでノロノロ片付けをしている運動部員がまだたくさんいた。駐輪場まで自転車を押しながら、急激な運動で激しくなっている鼓動をできるだけ鎮める。深呼吸、深呼吸、し……咽せた。

「うわ、背中からドキドキ聞こえるー」

咽せる私の背中をさすり、同じクラスの友達、中尾レナは言った。

「どうしてそんなに急いだの？ 寝坊？」

「違うよ、今日は寝起き最高だったし。ちよっとね」

「ほむほむ、寝起きがちよっと最高だったと」

何か変な誤解が生まれたみたいだけど、ここは置いておこう。

自転車を押して駐輪場へ再出発。なぜかレナもついて来た。彼女と会話すると退屈しないので、私は変に指摘したりせずになだ足を動かす。

「いい夢見れたのかなー？」

「どうだろう、海の夢だったからなあ」

「海？ じゃあ文句なしのいい夢だねー！」

「えと、海の中の夢」

「ダイビングかな。それともシュノーケリング？」

ダメだ。適当な説明ではレナと私の間にある認識の差を埋められない。

「そんな楽しい夢じゃないよ、暗い海の中でじっと動かずに漂う感じがだったはず」

夢の話をするのってあまり好きじゃない。覚えてないのに無理に思い出そうとする感覚。漢字テストで思いつかない漢字をひねり出すような、結局うる覚えで微妙に間違えてて点をもらえないようなまあ、夢の話の答え合わせなんて誰にもできないけれど。

「そっかー、それじゃ、あつ、つまんないね」

「うーん、つまらないってほどでもなかったような……」

「何もないのに?」

「何もないからこそ、かな」

私の言葉にレナは、んー、と首を傾げる。髪がさらつと流れて綺麗だ。どんなトリートメントを使ったらこんな綺麗な髪になるんだろう。

「ハギちゃんてすごいね、わたしだったら怖くて泣いちゃうかもー」
急に出てきた褒め言葉に私は慌てて手を振る。

「あは、すごくないよ、一人で考えるのが好きなだけ。暗闇って慣れちゃえば刺激が少なくて楽だし」

「一人が楽とか言わない!」

「言つてない」

駐輪場に自転車を停める。流石に着いたのが遅かったせいかなほとんどが埋まっついていて、私は奥の方の使いにくい所に停めるしかなかった。

「そんなことよりも……」

レナの方を振り返って意地悪く微笑む。

レナはと言えば、私の急変した態度にただオロオロ怯えるだけ。

「……?」

「瀬川君とはどこまで進んだのかなあ?」

「あ、あつ……」

レナは真つ赤になって固まった。少しだけ固まったレナを眺めて、その純な態度に萌えてからケータイで時間を確認、ついでに写メを撮る。よし、早いところ教室に行こう。もうすぐ予鈴だ。

私はクラス公認カップルの片割れを駐輪場に放置して自分の教室に向かった。

善し悪しよろしわろし

古典の授業は眠い。

名前の割に旅行好きな小森先生は授業中、「ね」とか「な」とか念を押すような語尾を多用する。まるで文章をいちいち音節で区切ってるかのように。しかも大事なところはしつこいくらいに繰り返す。すでに覚えてしまっていることでも繰り返す。

だから眠い。

「あう……」

どこからかあくびみたいな鳴き声が聞こえた。なんて、ぼかさなくともレナだけれど。

見回してみると、幾人かのクラスメートはすでに突っ伏している。頼杖について器用に寝ている生徒も一人。あの腕組みをしている生徒もきつと寝ているのだろう。さつきから微動だにしていない。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。『土佐日記』より。

古典そのものは好き。

だって短くなるから。現代語だと長い文章が、古典だと半分くらいになる。「早くしなさい」が「とく」だったり、「そんなことをしてくれるな」が「さなせそ」だったりするのだ。

それに、大和言葉って「みやび」な気がするし。平安貴族のイメージが強いからかな。読み書きできたのは貴族だけだったとか……？和歌もいい。たった31音の中に、自分の想いを何重にも掛け合わせて表現するんだから。和歌ができれば宮中に入れるっていうのも頷ける。難しいもん、和歌。

まあ、古文は全部ひらがなだから原文のままでは読めないけどね。書写している間に変化したりするし。源氏物語とか。

……あ。

例の文字列ってどんなだったっけ。

ゆめうつつ……？

よく覚えてないけど、確か32文字だったはず。字余りかも。

だとしたら、ゆめうつつ、って夢と現？

って、こんな風に考え事ばかりしてるから展開に絵がないとか言われるんだけど。

善悪論について、例えば私が一人で何日もうんうん唸って考えても、あるいは世界中の人が一堂に会して意見を出し合い議論しても正しい結論なんて出ないと思う。これは善事あれば悪事って決めることは出来ても、その境界を決めることは出来ないと思う。

何故か。

自然の中では善も悪もないから……かな。

所詮人間なんて動物の一種だし、いてもいなくても自然そのものには影響がない。

ここでいう自然はもちろん、どこぞの森林だとか、砂漠だとか、河川だとか、大気だとか、海洋だとか、そんなものじゃなくて、もっと大きくて絶対的な、地球とか宇宙とかの意味だけれど。

善悪なんて人間しか気にしない。それも、自分の為にしか気にしない。

もつと言えば、自分が善人に見えるかどうかを気にする人はいいても、悪人に見えるかどうかを気にする人はいない。善悪という感情^{エモ}の産物を感情^{エモ}以外の理由で気にする人はいない。

私がポイ捨てされたゴミを拾って袋に詰めるのは、その行為が私を善人に見せるからだし、私が人の嫌がる仕事を引き受けるのは、その行為が私を優しく見せるからだ。

もちろん純粹に善事をする人もいるだろうけれど、それもまた、

住む街が綺麗になるのは嬉しいからとか、みんなの喜ぶ顔がみたいからとか、つまり感情的理由なのだ。それらの善事は、人間の役にしか立たないのだから。

とはいえこれは、善事を咎める意見でも、悪事を勧める意見でもない。

ただ、人間目線で考えているうちは、善悪論を客観的に議論することも思考することもできないというだけの話だ。

と、やっぱり文章として書くと、どこか気取ってるな、私。

そもそも誰にも善悪論について正しい結論を出せないなら、私のこの落書きも正しくはないということになって、つまり誰にも善悪論について正しい結論を出せないという結論は正しくない。だれかしら、それが誰かは知らないけれど、善悪論について正しい結論を出せる人がいるのだ。

とまあ、論理パズルもびっくりの飛躍論理を披露してみたりして善悪論なんて、私ごときに扱える代物じゃない。

なのに考えてしまうのは、やっぱり例の赤い上書きのせいだろう。いたずらは、程度の差こそあれ、明確な悪だし。さて。

私は自分の部屋で32文字を再確認した。おさらい。

むきやうさみふはなかしし。

じゃなかった、これは覚え方だった。いつのまにか私の記憶を小森先生の幻覚がジャックしている。念を押す教育方法はすごい効果だった。

『ゆめうつつかきりあこかれならへともいつれもひとしくわれをみたさす』

五七五七七で区切ってみる。

『ゆめうつつ

かきりあこかれ

ならへとも

いつれもひとしく

われをみたさず』

……多分こんな感じ。最後のところは、「われ」なのか「くわれ」なのか判別つかないけれど。

区切って改行して書いてくれればすぐにわかったのにな……。それも含めていたずらか。

とりあえずそれっぽく漢字を充てて、出来た私の解釈がこれ。

『夢現

限り憧れ

習へども

何れも等しく

我を満たさず』

『夢や現実、限界や理想に慣れ親しんでも、どれも同様に私を満たしてはくれないのだ』

とまあ、掛詞も何もない、完成度の低い和歌だった。ていうか、まんまだよこれ。縁語はこじつければありそうだけれど。

ちなみに「習ふ」は「並ぶ（自動詞）」でも意味が通りそうだ。通リヤンセ。コワヒコワヒ。

そして、「われ」が「くわれ」だった場合、四句切れの和歌になる。

『夢現

限り憧れ

習へども

何れも等し

彼を満たさず』

『夢や現実、限界や理想に慣れ親しんでも、どれも同様だ。あなたを満たさないという意味では』

若干無理矢理のような気もするけれど。

私の落書きの上に書いてあったのだから、きっと私に向けてのメッセージだろう。

夢？ 現実？ 理想？ 限界？

だからなに？

みんな同じようなものでしょ？

そんな風な言葉が、和歌の中に詰まっている。

正体不明のいたずらは、私の思っている以上に攻撃的だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3905y/>

ラクガキマール

2012年1月14日15時47分発行